

会員のば

北海道がんセンター、 一部新築オープンしました

札幌医科大学医師会
北海道がんセンター

藤川 幸司

9月6日の北海道胆振東部地震で被災された方々へ、心からお見舞い申し上げます。

その日、小生は自宅マンションでTVをつけたまま寝入っていましたが、スマホからの緊急警報で目覚め、今まで経験したことがない大きな揺れに少し恐怖を覚えました。幸いわが家は大事に至らず、さてどうしようかと思案しながらつけ放しだったTVのチャンネルをNHKに合わせると「札幌市中央区震度4」のテロップが流れ（たぶん）、「今の所、停電はないよう…」のアナウンスと同時に停電になりました。しかしまさか…全道的なブラックアウトだった…とは想像だにしませんでした。その後、LINEで病院に大きな被害がないことが確認できたので、夜が明けてから車で出勤（普段は地下鉄通勤）すると、8月中旬に新棟に移転したばかりの医局では、床には本棚から落ちたファイルが散乱し、引っ越し途中の積み上げたままのダンボールが転がっていました。旧来の病棟では、入院患者さんやスタッフに怪我はなく、徒歩で出勤したスタッフも多数いたため、病棟業務に大きな支障はなかったようです。外来も、どこまで業務が可能かについての情報が錯綜しましたが、来院者には採血、診察、投薬、化学療法までなんとか対応できました。幸い翌日には停電が解消されて通常の診療が可能となりました。復旧にあたっていただいた関係者の皆さまに感謝申し上げます。

さて当院は、明治29年に札幌衛戍病院として開院し、昭和20年には国立札幌病院と改称して、昭和43年には北海道地方がんセンターを併設してから今年で50年目になります。この歴史と共に老朽化した病院の建て替え工事が平成29年4月末から始まって第1期工事が終了し、8月11日に医局と事務部門が、9月3日には診療部門の一部が新棟に移転しました。この新棟には小生も基本設計に加わった「内視

鏡センター」が含まれており、新規オープン3日目に起こった震災当日も、真新しい内視鏡センターで、限られた状況でしたが検査できたことは、忘れ得ぬ思い出になりました。

ここで新しい内視鏡センターを紹介します。待望のTV付き待合室をはじめ、更衣室やロッカー、前処置スペース、前処置用トイレが新設され、検査前の不安が少しでも軽減されるようにしました。検査室は1室増えて、消化管内視鏡2室、内視鏡手術室が1室、気管支鏡用1室が設置されました。さらに気管支鏡や胆膵造影検査用の透視室2室にはC-アーム透視装置が新設され、よりスムーズな精密検査・処置が可能となりました。限られたスペースを気持ち良く使えるように、いまだに机や電子カルテ、プリンターなどの模様替えにいそしんでいます。

実は最近、目が見えにくくなったため眼科を受診し、右眼の網膜出血と診断されました。新棟への引っ越しで、重い物を運ぶのに力み過ぎたのでしょうか？ 小生もがんセンターに赴任して17年目になり老朽化が進んでいますが、新築された病院とともに、もう少し頑張ろうかと考えています。

